

## 英語における移動現象と EPP 素性について —移動現象における vP 位相周縁部使用についての一考察—

根 本 貴 行

### On Movement and EPP Features in English —A study About Whether a Spec of vP is Used as an 'Escaping Hatch' or Not—

Takayuki NEMOTO

#### ABSTRACT

Chomsky (2000) assumes that CP and vP are phases because they are propositional. Under this assumption, derivations proceed with multiple spell out; once syntactic elements merge into propositional, it must be spelled out into PF component. The phases once spelled out are invisible, so that the moved words or phrases should rise into the edge of phase, that is, Spec of CP or vP. That is why Last Resort or motivation for movement is very important notion in generative grammar. What is the motivation for movement to the vP? In this article I verify an EPP feature, which is assumed to be a motivation for a movement and to attract syntactic elements into its Spec position. Analyzing contraction forms between subject and verb, and pseudo-gapping in English, I conclude that there is weak empirical evidence to support EPP features in vP, while other languages like French and others from Northern Europe show that vP Specs are used to host long distance movement.

#### 1 はじめに

生成文法の研究では、成人の文法(個別文法)とはどのようなものであるかを検証することにより、成人が持っている文法上の普遍性を抽出し、普遍文法を構築すること、そしてさらに普遍文法から個別文法への写像過程、すなわち人の言語習得過程を明らかにすることを目標に掲げ、調査が行われてきた。前者はいわゆる記述的妥当性に、後者は説明的妥当性に相当すると考えられる。また、Chomsky (1995, 2000,

2001, 2004) などにより、極小主義の枠組みでは、言語はどの程度完全なのかという問いも新たに発せられ、研究指針に加えられた。言語には統語要素の移動(displacement)が古くから観察されており、言語が完全な形で設計されているとすれば、移動現象はこれと矛盾するものとなる。これに関して Chomsky は、文法(いわゆる文派生の計算システム:  $C_{HL}$ )は言語内に見られる諸現象を最適な方法で計算できるシステムに設計されていると仮定している。そもそ

も移動とは、派生の途中で導入された EPP 素性（拡大投射原理素性）により、この素性を消去するために、既に派生の中に導入された統語要素（例えば語句）が EPP 素性を持った要素の指定部の位置に移動を促されることにより生じる<sup>1</sup>。極小主義で仮定されている完全解釈の原理（full interpretation）は、LF（もしくは CI：概念意図）における統語計算の出力において、統語計算の外部にとって解釈不可能な要素が含まれてはならないとする規定である。EPP 素性は外部への出力の際解釈されない要素であると仮定されており、派生の中で消されずに残ってしまうと、その派生は破綻してしまうことになる。

言語の完全性という概念下では、EPP 素性はその完全性から逸脱する移動にまつわる重要な働きを担っていると考えられている。

現状としては、EPP 素性は理論上欠くことのできない概念の一つであり、それが果たす役割は非常に大きい。三原（2004）のように EPP 素性を廃止する方向性を模索する動きも存在する。本稿では、極小主義で仮定されている EPP 素性の扱いについて、以下の順で検証してみたい。はじめに、EPP 素性が理論上あるは派生上果たす役割を論じる。次に、C と T、v のそれぞれに EPP 素性が仮定されなければならない経験的証拠を挙げ、検証する。C と T の EPP 素性は、移動を動機付け、また経験的に中間痕跡によって裏付けられるものであるが、v に仮定されている EPP 素性については、経験的証拠として弱いものしか得られないことを疑問詞移動、縮約形、そして擬似空所化を通して見ていく。帰結として、vP 指定部は言語によってパラメータ化されており、英語では vP 指定部が移動先もしくは移動経由地として用いられていない可

能性を指摘する。

## 2 EPP 素性の果たす役割

そもそも EPP とは Emonds 以来仮定されてきた概念である。主語繰上げ構文や存在構文における虚辞は、動詞が付与する  $\theta$  役割に従って形成された基底構造（極小主義以前の枠組みにおける D 構造）には現れない。英語では義務的に主語が要求され、 $\theta$  役割を持たない主語が出現することから、主語の投射である TP 指定部（極小主義以前の枠組みでは IP）を保証する拡大投射原理が仮定された。

一方、極小主義における文派生では、既に述べた通り、完全解釈の原理により、派生に導入された統語要素が持つ解釈不可能な素性（DP の性、数、人称の  $\phi$  素性と格素性、機能範疇を持つ格素性、wh 素性など）は、派生のどこかの段階で削除されなければならない。初期の極小主義のシステムでは、一連の解釈不可能な素性そのものが移動を誘発する動機となった。すなわち、解釈不可能な素性を持った統語要素は、それを削除することができる機能範疇の指定部に移動することにより、照合の結果削除されるため、派生の破綻を免れることができる。

- (1) [what<sub>i</sub> C(+wh) did [T(Nom)  
[<sub>vP</sub> Mary [<sub>VP</sub> read t<sub>j</sub>]]]

(1)において、主語 Mary は格素性をはじめとして諸形式素性を有しており、このままでは完全解釈の原理により派生が破綻してしまう。従って、この素性を照合し削除するために T の指定部へ移動することにより T の Nominative 他の形式素性と照合し、完全解釈の原理の抵触

<sup>1</sup> T の EPP 素性は、vP 内主語の移動により削除される他、虚辞の TP 指定部への融合により行なわれる可能性もある。Collins (1997) 参照。

Chomsky (2000, 2001, 2004) 等で述べられている枠組みでは、格素性と  $\phi$  素性の照合は照合元が探査 (probe) となり照合可能な素性を持った目標 (goal) を探し、「一致」(Agree) により照合される。従って、格素性と  $\phi$  素性を持った DP は移動を介さずに解釈不可能素性を削除することができることとなる。

- 存在構文において、動詞は *there* の連合語 (associate) と一致することから、様々なシステムが提案されてきた。Chomsky (1986) や Lasnik (1999) では、*there* を LF における接辞と仮定している。連合語は LF で非顕在的に *there* まで上昇して *there* の LF 接辞としての条件を満たした上で、ここで連合語と T が照合関係に入る。しかし、Probe-Goal のシステムでは、連合語は「一致」により照合が行われるので、*there* の LF における語彙特性の規定が必要無くなる。

る。C は EPP 素性を持ち、what を誘引することにより (1) が派生される。一方、(2) の派生において、連合句は一致により there へは上昇せず、格素性と  $\phi$  素性の削除が行われる。極小主義の枠組みでは、経済性の原理によって、数え上げ (numeration) から語彙を選択して融合する外的融合の方が、既に派生に導入された統語要素を選択肢目標の位置へ融合 (移動) させる操作のほうがよりコストが高いと仮定されている。

- (4a) (5a) は (3) の派生が非定型節まで進んだ段階を示している。(4b) では TP が形成される際、虚辞が外的融合により導入され、(4c) へと派生が進んでいる。しかし、非文法的な文を派生する (5) では、b の段階で TP が形成される際に、外項が内的融合によって派生されている。(5) が非文法的になるのは、b の段階で (4) よりコストの高い内的融合が選択されているためであると考えられる<sup>2</sup>。

— 179 —

- (6) a. It rained hard yesterday.  
b. It was dark in that room.

既に見たとおり、wh 移動に関しても C に EPP 素性を仮定することで、多重 wh 疑問文における移動可能な疑問詞の候補を絞り込むことが可能となった。

- (7) a. Who<sub>i</sub> did she say t<sub>i</sub> bought what?  
b. \*What<sub>i</sub> did she say who bought t<sub>i</sub>?

(7b)は、what が who を越えて主節 CP の指定部へ移動しており、最小連結条件 (Minimal link condition) 違反であるが、そもそも C の EPP 素性から見て誘引できる要素は、より上位の who であるため、(7b)の派生は得られない。

EPP 素性の生起位置として、主語を要求する T の EPP 素性と wh 移動を誘発する C の EPP 素性が考えられているが、統語要素の長距離移動の際、v にも EPP 素性が仮定されている。Chomsky (2000)において、EPP 素性の生起に関して、その派生の意味部門における出力に影響を及ぼす限りにおいて、随意的に利用可能であると述べている<sup>3</sup>。この v に仮定される EPP 素性は、Chomsky (2001)の枠組みによる位相 (Phase) のシステムにとって不可欠なものになる。位相システムでは、位相ごとに書き出し (Spell out) もしくは移転 (Transfer) が適用され派生が進む。したがって、一つの位相が

書き出しを適用されると、次の位相を形成する派生計算からは不可視的なものになってしまう (PIC (=Phase Impenetrability Condition: 位相不可侵条件))<sup>4</sup>。Chomsky (2001)では (8) (9) のような取り決めが行なわれている。

- (8) 位相は命題的なもので、項構造が全てそろっている vP と、force を持った CP とする。  
(9) 書き出しが適用された位相は、派生の計算システムからは見えなくなる。ただし、位相の周縁部 (Edge) のみ、次の位相に対して可視的である。

このシステムの下では、(10a) (= (1))の派生は以下のように示される。

- (10) a. What did Mary read?  
b. [<sub>vP</sub> Mary v(EPP) [<sub>vP</sub> read what]]  
c. [<sub>vP</sub> what<sub>i</sub> Mary v(EPP) [<sub>vP</sub> read t<sub>i</sub>]]  
←書き出し  
d. [Mary<sub>j</sub> T(EPP) [<sub>vP</sub> what<sub>i</sub> t<sub>j</sub> v (EPP) [<sub>vP</sub> read t<sub>i</sub>]]]  
e. [CP what<sub>i</sub> C(EPP) [Mary<sub>j</sub> T [<sub>vP</sub> t<sub>j</sub> t<sub>j</sub> v [<sub>vP</sub> read t<sub>i</sub>]]]]

(10a)の文が、融合が繰り返されて vP まで進んだとしよう。(10b)の段階で、vP が形成される。vP は位相なので、次の位相レベルからは vP の指定部だけが計算上利用可能な位置である。

<sup>2</sup> Probe-Goal システム以前の枠組みでは、外的融合が  $\theta$  役割の付与により動機付けられるが、内的融合は移動が誘発された際、格素性や  $\phi$  素性の一致といった外的融合以外の操作も関わるため、コストが高いと考えられていた。しかし現行システムでは、内的融合も唯一 EPP 素性照合のみが動機となるので、単純に経済性に関して内的融合と外的融合を比較できなくなる恐れがあると考えられる。

<sup>3</sup> Chomsky (2000) では、vP 指定部を escape hatch として利用するために仮定されている素性を OCC 素性と呼んでいるが、下位の統語要素を指定部の位置へ誘引する素性として EPP 素性と考えても差し支えない。

<sup>4</sup> In phase  $\alpha$  with head H, the domain of H is not accessible to operations outside  $\alpha$ , but only H and its edge. (Chomsky 2000)

v は EPP 素性を持ち、what を誘引する(10c)。次に T が融合され、T の格素性と  $\phi$  素性が Probe-Goal により Mary と「一致」し、それぞれの解釈不可能な素性が消去される。T は EPP 素性を持つので、Mary が T の指定部に移動することで EPP 素性が消去される。さらに C が融合されると、C の +wh 素性が Probe-Goal のシステムにより vP 指定部にある what と一致し、C の EPP 素性が what を CP 指定部へ誘引する。Mary も what も下位位相 vP の端(指定部)にあるため、上位位相からの誘引が可能である。

この Probe-Goal システムと位相システムにおいて、EPP 素性が果たす役割と CP と vP を位相として仮定し、位相ごとに移動操作を行なう、いわゆる Minimal Link Condition を形成するアイディアには、極小主義あるいは経済性を考慮した際の問題点、もしくは言語習得過程を考えた上での問題点が挙げられる。次章ではそれらを指摘したい。

### 3 EPP 素性の経験的証拠

前章で見たとおり、格素性と  $\phi$  素性の一致が機能範疇と移動要素の間で、後者の基底位置において probe-goal のシステムで行われるため、移動を誘発する EPP 素性が仮定されている。vP 内に融合した主語 DP の TP 指定部位置への移動や、疑問詞移動などについて、EPP 素性の果たす役割が大きいと考えられる。本章では、位相システムのもとで、位相を越えて要素が移動する際に、EPP 素性が v に仮定される経験的証拠を挙げ、それらの証拠に基づき問題点を指摘する。

vP は位相であるため書き出しを受けてしまうので、vP 内の要素が vP より上位の位相に上昇するためには、位相間縁部である vP 指定部を利用しなければならない。これは障壁理論で

IP と VP が重なり継承障壁を形成するため、VP 以下のレベルから上位へ移動する要素が一度 VP に付加する操作を想起させる。極小主義の枠組みでも vP をいわゆる escape hatch として仮定しなければならない経験的な理由とはどのようなものであろうか。

v に EPP 素性が仮定される証拠として、はじめに、いわゆる目的語転移 (object shift) が挙げられる。

$$(11) \text{ } [_{VP} \text{ Obj}_i \text{ } [_{VP} \text{ Subj } v \text{ } [_{VP} \text{ V } t_i]]]$$

北欧の言語では、他動詞文の主語において虚辞が表れることができる。v の EPP 素性によって VP 内から目的語 DP は上昇し、(11)で示された構造へと達する。次の段階で、T が融合され、T の EPP 素性を満たすために主語の上昇か、又は虚辞の融合が選択される。虚辞の融合が選択された際の語順は、虚時—動詞—目的語—主語となり、ここで表される語順によって、目的語の vP 指定部への移動が支持される。Chomsky (2000) は、北欧の言語で観察されるこの現象に基づいて、一つの言語に仮定される構造を普遍的な構造として仮定すべきであることを述べている。

v に仮定される EPP 素性の二つめの経験的証拠として、wh 移動が生じた際、wh 語句と動詞の一致現象が挙げられる。

$$(12) \text{ Hafa si Maria s-}\underline{\text{in}}\text{-angane-nña as} \\ \text{Joaquin?} \\ \text{What did Maria } \underline{\text{wh}} \text{ say to AGR} \\ \text{Joaquin} \quad (\text{Radford 2004})$$

疑問詞 Hafa (what) は VP の目的語の位置から移動しており、vP 位相を超えていることから vP 指定部を経由していることが予想される。

(12)のチャモロ語の例では、疑問詞がvP指定部を経由した証拠として、動詞 angane (say) が疑問詞との一致を起しており、接辞付加が生じている。

三番目の例として、疑問詞移動が生じると、動詞と主語の縮約が禁止される例が挙げられる。縮約に関する制限としてよく知られている例に wanna 縮約がある。

- (13) a. I wanna wash my car.  
 b. I want you to wash my car.  
 c. \*Who do you wanna wash your car?

(13c)が非文であるのは、縮約される前の want と to の間に who の痕跡があると考えられるからである。この制約と同様のことがvP指定部を経由した疑問詞によって生じていると Radford (2004) は述べている。

- (14) a. They've beautiful flowers.  
 b. What beautiful flowers they have!  
 c. \*What beautiful flowers they've!  
 d. [what beautiful flowers<sub>i</sub> [<sub>TP</sub> they [<sub>VP</sub> t<sub>i</sub> [<sub>VP</sub> have t<sub>i</sub>]]]]

(14d)において、疑問詞は位相vPを超えて文頭へ移動しており、位相vPが書き出しを受けて次の位相へと派生が進む前に、疑問詞は位相の周縁部であるvP指定部まで繰り上がっていないとCのEPP素性による誘引が行なわれなくなってしまう。故に、疑問詞はVP内からvP指定部を経由してCP指定部へ至ると考えられる。wanna縮約と同様、(14)の縮約にも隣接条件が課せられるとすれば、vP指定部にある疑問詞の痕跡が主語のtheyと動詞haveの隣接を阻むため、縮約形が認められず、(14c)の非文法性が説明される。

最後に、擬似空所化 (pseudo-gapping) の例を挙げたい。擬似空所化とは、空所化の際に助動詞と目的語を残したまま動詞が削除される現象である。

- (15) a. If you don't believe me, you will the weatherman.  
 b. I rolled up a newspaper, and Lynn did a magazine. (三原2004)  
 c. [<sub>TP</sub> you<sub>i</sub> will [<sub>VP</sub> the weather man<sub>j</sub> t<sub>i</sub> [<sub>VP</sub> ~~believe~~ t<sub>j</sub>]]]

三原 (2004) や Lasnik (1999) によると、擬似空所化は、VP内の目的語がvPへ上昇した後に動詞を含んだVP全体が削除されたものとして分析されている。

以上、ここで見たvPの指定部が要素の着地位置として用いられていると考えられる分析を見てきたが、以降で、これらのいくつかの分析が、vP指定部が用いられていないか、用いていない分析によっても説明可能ではないかということ提案したい。

#### 4 EPP素性の問題点

既に見た通り、統語要素を誘引するEPP素性は、統語計算の出力に影響を与える時、CとT、vに仮定される。本章ではそれぞれの位置に仮定されるEPP素性の存在動機を検証し、問題点を指摘する。

CとTのEPP素性は、それぞれ疑問詞の誘引とvP内主語DPの誘引に寄与する。しかし、疑問詞移動を含んだ文の派生において、vP指定部にwh句が移動した後の段階で問題が生じる。前章(10)(= (16))の例で、whatがvPへ移動した後、次の段階でEPP素性を持ったTが融合する。

(16) a. [T (EPP) [<sub>VP</sub> what<sub>i</sub> Mary v [<sub>VP</sub> read  
t<sub>i</sub>]]]

b. [<sub>CP</sub> what<sub>i</sub> C (EPP) [Mary<sub>j</sub> T [<sub>VP</sub> t<sub>i</sub>  
t<sub>j</sub> v [<sub>VP</sub> read t<sub>i</sub>]]]]

T と Mary の格素性が  $\phi$  素性による一致で消去され、T の EPP 素性が Mary を誘引する。さらに派生が進み、C が融合すると、C の EPP 素性が what を誘引する。もし、EPP 素性が統語要素を指定部に要求する素性であるとするれば、(16a)の段階で T の EPP 素性が誘引可能な語句は what と Mary である。what は vP が位相として書き出しを受ける際、さらに文頭へ移動するため位相の周縁部である vP 指定部へ移動をしている。この位置は T から見ると等距離 (Equidistance) であるため、誘引の候補として Mary が選択されることが可能である。しかし、C や T が持つ EPP 素性に何ら区別がなされないとすれば、T が what を誘引することを禁止することはできない。EPP 素性を疑問詞誘引用と主語 DP 誘引用とに分けたとしても、極小主義の精神に反し、アドホックな仮定となってしまう。Chomsky (1995) で仮定されている範疇素性は、機能範疇が持つ場合は派生の出力において解釈不可能であり、語彙が持つ場合は解釈可能である。後者の場合、照合が行われても素性の消去は行われず、後の統語計算に用いることが出来る。(16a)の段階で、T と Mary は格素性と  $\phi$  素性の照合が行われているが、T の EPP 素性に範疇素性を持たせれば、Mary の D 素性との照合による誘引も可能かもしれないが、疑問詞が what や which など D 範疇の場合は Mary とどのように区別するのか技術的な問題が残る。同様に(16b)の段階で、もし、EPP 素性がその指定部に範疇 D を誘引する動機付けがあるならば、C の EPP 素性が誘引可能な要素は Mary となる可能性が出てくる。(16a)にお

いて T の EPP 素性から見た what と Mary の等距離の関係とは異なり、(16b)の場合は明らかに C から見て Mary のほうが距離が短い。Mary は格素性と  $\phi$  素性の照合が済んでおり、これらの照合後は統語計算に入らないとすれば、what も最初の融合位置もしくは vP 指定部位置で動詞との対格素性および  $\phi$  素性の一致が行われているはずで、照合後の移動操作が適用されないという説明は成り立たず、(16b)の派生は得られないことになってしまう。

次に、前章で見た v の EPP 素性の例から生ずるいくつかの問題点を指摘したい。疑問詞移動の際、動詞との一致が観察されるチャモロ語の例(17) (= (13))において、もし目的語と動詞の一致が probe-goal のシステムによって行われるとすれば、疑問詞を含んだ要素が vP 指定部を経由しなくても一致現象が観察されることにならないだろうか。

- (17) Hafa si Maria s-in-angane-nña as  
Joaquin?  
What did Maria wh say to AGR  
Joaquin

初期の極小主義の枠組みでは、格素性の一致システムが主格、対格とも機能範疇 Agr のもとで行われた。

- (18) [<sub>CP</sub> C [<sub>TP</sub> T [<sub>AGRSP</sub> AgrS [<sub>AGROP</sub> AgrO  
[<sub>VP</sub> V XP]]]]]

目的語に疑問詞を含んでいない場合、対格は AgrP の指定部に移動することにより AgrP へ主要部移動した動詞との間で照合が行われた。一方、目的語に疑問詞が含まれた場合は、目的語が対格を付与された後に CP 指定部へ移動するのか、疑問詞が CP 指定部へ移動した後に何

らかの方法で対格の照合がなされるのか不明であった。前者の場合は AgrOP 指定部へ A 移動した後で CP 指定部へと A' 移動することとなり不適正移動 (improper movement) の可能性を孕む可能性がでてくるため、いずれにせよ問題が残されていた。現行のシステムで以下のフランス語の例を考えてみたい。

(19) a. Il a commis quelle bêtise?

He has committed what blunder

b. Quelle bêtise il a commise?

(Radford 2004)

疑問詞移動が生じていない(19a)では動詞 *commis* は目的語との一致が生じていないが、疑問詞が文頭まで上昇している(19b)では *commise* のように語尾変化が生じている。そもそも現行のシステムにおいて、動詞と対格、もしくは動詞とその補部との関係が、移動ではなく probe-goal の関係によって一致が行われるのであれば、(19a)でなぜ語尾変化が生じていないかを考えなければならない。Chomsky (1995) が Kayne (1989) を引用して、フランス語における疑問詞移動で、疑問詞を含んだ目的語と動詞の間の一致が随意的である例を挙げている。Kayne が述べていることを現行のシステムに置き換えて述べれば、疑問詞の vP 指定部経由が随意的であるということになり、位相の周縁部を経由しない派生が許可されたとすれば vP を位相として仮定しているシステムにとっては問題となる。

そもそも、疑問詞を誘引するための EPP 素性は、主文の C における文の Force を規定する位置もしくは従属節の C で主文動詞によって間接疑問文が選択されたときに生じることが自然である。Chomsky が述べているように、EPP 素性が出力に影響を及ぼす限りにおいて随意的

に利用可のであるとすると、C において EPP 素性が選択された際に、下位の位相である v に EPP 素性が現れることをどのように保証することが出来るのか問題となる。

さらに、vP 指定部は A 移動の際も escape hatch となる。

(20) a. Bill seems to be likely to be late for the lessons.

b. [<sub>TP</sub> Bill T [<sub>vP</sub> t v [<sub>vP</sub> seems [<sub>TP</sub> t to [<sub>vP</sub> t be late for the lessons]]]]]

従属節 vP 指定部に融合した主語 Bill は、従属節 TP 指定部を経由して T の EPP 素性を削除し、次に主節 vP 指定部へ移動している。vP は位相なので、この移動により vP が書き出しを受けた後でも、vP の周縁部にある Bill は上位の位相からアクセス可能となる。vP 指定部が非格位置で A' 位置であるとする、非適正移動 (improper movement) として扱われる可能性がでてくる。

## 5 v の EPP 素性再検証

本章では、3 章で見た v の EPP 素性についてあらためて検証し、それらの経験的証拠が弱いことを述べる。

はじめに、v の EPP 素性を消去するために疑問詞の移動が仮定され、主語と動詞の縮約形が禁止される(21) (= (14)) の例では、縮約されると非文法的となるのは、vP 指定部の痕跡ではない可能性がある。

(21) a. They've beautiful flowers.

b. What beautiful flowers they have!

c. \*What beautiful flowers they've!

d. [what beautiful flowers<sub>i</sub> [<sub>TP</sub> they [<sub>vP</sub> t<sub>i</sub> [<sub>vP</sub> have t<sub>i</sub>]]]]]



(21d)で、疑問詞を含んだ DP 全体が vP 指定部を経由して文頭へ移動しているため、vP 指定部の痕跡により主語と動詞の縮約が阻まれていると述べたが、母語話者の直感によると感嘆文の動詞には弱い強勢が生じるため、何らかの音韻規則により縮約形が阻まれている可能性がある。

また、wanna 縮約についても、英語母語話者の直感では、(22) (= (13)) よりも (23) の容認度が向上することから、移動要素の痕跡が縮約形を禁止するか疑わしいものとなる。

- (22) a. I wanna wash my car.  
 b. I want you to wash my car.  
 c. \*Who do you wanna wash your car?
- (23) a. ?What do you wanna wash?  
 b. what<sub>i</sub> do you [want [<sub>CP</sub> t<sub>i</sub> [<sub>TP</sub> PRO to wash t<sub>i</sub>]]]

疑問詞の基底位置における痕跡は縮約形を禁止する要因となるが(22c)、want と to の間に中間痕跡が介在している(23)の例では、容認度が向上している。(21)における主語と動詞の縮約についても、主語と動詞の間に介在しているのは疑問詞を含んだ DP の中間痕跡であることから、もし vP 指定部に痕跡が生じているとしても、痕跡が(21)の文法性を落としていることにはならない可能性がある。

次に、擬似空所化の例について、(24) (= (13)) を見てみたい。

- (24) a. If you don't believe me, you will the weatherman.  
 b. I rolled up a newspaper, and Lynn did a magazine.  
 c. [<sub>TP</sub> you<sub>i</sub> will [<sub>VP</sub> the weather man<sub>j</sub> t<sub>i</sub> [<sub>VP</sub> believe t<sub>j</sub>]]]

擬似空所化では、目的語は vP へ繰り上がることにより削除を免れているという提案を見たが、以下の例から、擬似空所化において VP 全体が削除されていない可能性があることがわかる。

- (25) a. I quickly turned my head at the sound of the explosion, but Bill the same gently.  
 b. I quickly turned my head at the sound of the explosion, but Bill gently the same.  
 c. ... but [<sub>TP</sub> Bill [<sub>VP</sub> the same<sub>i</sub> [<sub>VP</sub> gently [<sub>VP</sub> believe t<sub>j</sub>]]]]]

(25c)は(25a)の等位接続部分の構造を示したものである。副詞 gently が VP に付加しているとしよう。目的語が vP 指定部へ繰り上がった後で付加部の副詞を除いた VP が削除されている。付加詞が付加している最大投射が、付加詞を除いて削除可能かどうかは技術的に問題の生ずるところではあるが、構造的には(25a)の語順が派生される。しかし、(25b)のように副詞が動詞より先行している文は問題となる。

ここで付加詞の位置について、(26)の例で検証してみたい。

- (26) a. The DA proved the defendants to be guilty during each other's trials.  
 b. \*The DA proved that the defendants were guilty during each other's trials.

(Chomsky 1995)

(26a)の例外的格付与構文(ECM)では、不定詞句より高い位置に付加している前置詞句内の再帰代名詞を目的語の the defendants が指示し

ていることから、目的語が主節の何らかの位置に繰り上がっていることがわかる。一方、(26b)の定形従属節では、その主語は主節まで繰り上がることはあなく、主節付加部内の再帰代名詞を支持することはできず、非文法的である。(26a)の構造として(27)を提案する。

- (27) [TP the DA [vP [v' proved<sub>i</sub> [vP the defendants<sub>j</sub> [v' [v' t<sub>i</sub> [TP t<sub>j</sub> to [vP t<sub>j</sub> [vP be guilty]]]]] each other's trials]]]]]

付加部は主節 V' に付加していると仮定する<sup>5</sup>。主節動詞は V から v へと可視的に移動し、目的語の the defendants は従属節 vP 内に基底生成され、従属節 TP 指定部を経由して主節 VP 指定部まで繰り上がっている。従属節 TP 指定部への移動は、英語一般に見られる T の EPP 素性の誘引であるので問題はない。それでは、TP 指定部の DP を主節 VP へ誘引する動機はどのようなものであろうか。TP は位相ではないので、the defendants が TP 指定部に移動してきた時点で、主節動詞による素性照合は可能である。また極小主義の枠組みでは、これまで見てきた通り、VP は位相ではないので統語要素の VP への移動は仮定されておらず、V の EPP 素性もあり得ない。そこで、 $\theta$  役割を素性もしくは従来の照合システムによって行われるものであるとしてみたい。(27)において、the defendants は従属節内の位置から  $\theta$  役割を受け取るために主節動詞の照合領域内<sup>6</sup>に移動しなければならない。これに基づいて(25)の構造を示すと、

以下の通りになる。

- (28) ... but [TP Bill<sub>j</sub> [vP t<sub>j</sub> [v' gently [v' turned<sub>i</sub> [vP the same t<sub>i</sub>]]]]]

(28)の構造では、目的語は VP 内において動詞の照合領域あるため、ここで  $\theta$  役割を得る。動詞は v へ主要部移動し、主語 DP と融合する。この位置で、主語 DP は動詞の照合領域に入るため  $\theta$  役割を受け取ることが出来る。極小主義が仮定するように v に EPP 素性があり、目的語 DP が vP 指定部へ繰り上がった後に VP 削除が行われれば、(25a)が派生される可能性はある。しかし、ここでは副詞が機能範疇である v' に付加されており、語彙の機能範疇への付加が可能であるか、検証する必要が生じてくる<sup>7</sup>。また、依然として(25b)の語順が得られず問題として残る。

最後に、英語における v の EPP 素性について反証となる例を付け加えておきたい。Sportiche (1988)によれば、数量詞遊離は DP の痕跡生じることとなる。もし英語における疑問詞移動が vP 指定部を経由するとすれば、vP 指定部に遊離した数量詞が出現するはずである。McCloskey (2000)による、英語の West Ulster 方言の分析によると、疑問詞移動において以下のような数量詞の遊離が観察されている。

- (29) a. What all did he say that he wanted?  
b. What did he say that he wanted all?  
c. What did he say all that he wanted?  
(McCloskey 2000)

<sup>5</sup> 付加が派生の途中で行われるとすれば、主節 V が非定型従属節 TP と融合した段階では VP を形成しているため、可能であると考えられる。

<sup>6</sup> 以下の構造において X の照合領域は、UP と ZP およびそれらが支配する部分である。  
[<sub>XP1</sub> UP[<sub>XP2</sub> ZP[<sub>X</sub>' X YP]]]

<sup>7</sup> Koizumi (1999)、Ura (2000) 参照。

- d. \*What did he all say that he wanted?
- e. \*What did he say that he all wanted?

これまでの仮定に従えば、(29)の疑問詞は文尾より従属節 vP 指定部、従属節 CP 指定部、主節 vP 指定部を経由して文頭へ繰り上がっている。(29b)は数量詞が疑問詞の基底位置に残留している例である。また(29c)は従属節 CP 指定部に数量詞が残留している。しかし、(29de)が示しているように、数量詞の vP 残留は非文法的であるとの判断がなされ、ここでも v が EPP 素性を持つことに対して問題が生ずる結果となる。

## 6 まとめ及び展望

英語における EPP 素性の扱いについて、EPP 素性の経験的証拠を検証してきた。主語における EPP 素性は、義務的な主語の出現により疑いようの無いものであろう。また C の EPP 素性については、疑問詞の移動と遊離数量詞の例など、その存在を示す強い証拠が観察される。しかし、英語における v の EPP 素性については、否定的もしくは弱い証拠しか得られないということを述べてきた。本論で見たとおり、フランス語や北欧の言語、チャモロ語の例から、v における EPP 素性が仮定されなければならない言語もあり、これは言語によるパラメータの違いとして考えるべきであろう。

英語における v の EPP 素性に対する否定的な証拠として、擬似空所化と縮約形の例を挙げたが、もし v の EPP 素性による説明が成り立たないとすれば、それぞれの構造がいかなるものなのか、さらなる分析をすすめる必要がある。当然のこととして vP を位相として仮定しているシステムを変更し、理論上の整合性を検証する必要が生じる。

また、生成文法が子供の言語獲得過程を説明しようとする説明的妥当性を掲げている以上、

EPP 素性の獲得過程を検証する必要もあろう。EPP 素性が獲得されれば移動現象が観察されはずで、疑問詞の移動と動詞句内主語の TP 指定部への移動、虚辞の出現がどのようなタイミングで観察されるのか興味のあるところである。

## 参考文献

- Chomsky, Noam (1986) *Barriers*, MIT Press
- Chomsky, Noam (1995) *The Minimalist Program*, MIT Press
- Chomsky, Noam (2000) “Minimalist Inquiries: The Framework,” *Step by Step: Essays on Minimalist Syntax in Honor of Howard Lasnik*, ed. by Roger Martin, David Michaels and Juan Uriagereka, MIT Press
- Chomsky, Noam (2001) “Derivation by Phase,” Ken Hale: *A Life in Language*, ed. By Michael Kenstowicz, MIT Press
- Chomsky, Noam (2004) “Beyond Explanatory Adequacy,” *Structures and Beyond: The Cartography of Syntactic Structures*, Vol. 3, ed. by Adriana Belletti, Oxford University Press
- Collins, Chris (1997) *Local Economy*, MIT Press
- Koizumi, Masatoshi (1999) *Phrase Structure in Minimalist Syntax*, Hituji Syobo
- Lasnik, Howard (1999) “Chains of Arguments,” *Working Minimalism*, MIT Press
- McCloskey, James (2000) “Quantifier Floating and WH-Movement in an Irish English,” *Linguistic Inquiry* 31
- 三原健一 (2004) 『アスペクト解釈と統語現象』 松柏社
- Radford, Andrew (2004) *Minimalist Syntax: Exploring the Structure of English*, Cam-

bridge Press

Sportiche, Dominique (1988) “A Theory of Floating Quantifiers and Its Corollaries for Constituents Structure,” *Linguistic Inquiry*, 19

Ura, Hiroyuki (2000) *Checking Theory and Grammatical Functions in Universal Grammar*, Oxford University Press